2）トレンチ８

この調査区では、石囲いの「水受け」を確認しました。水受けとは、流れてくる水を受ける槽のことで、ここでは本壇石垣上部の石樋から流れてくる雨水等を受ける一枚石と石囲いがこれにあたります。城内には、石樋が数多くありますが、水受けが確認されているのはこの場所と本丸南側の揚木戸門の内側（西）のみです。

また、昨年の調査でこの水受けに連結すると考えられる石組溝を確認し、この溝はさらに本丸東面石垣の石樋に繋がっていることが分かりました。これらのことから、本壇から本丸外への排水経路の一つを捉えることができました。

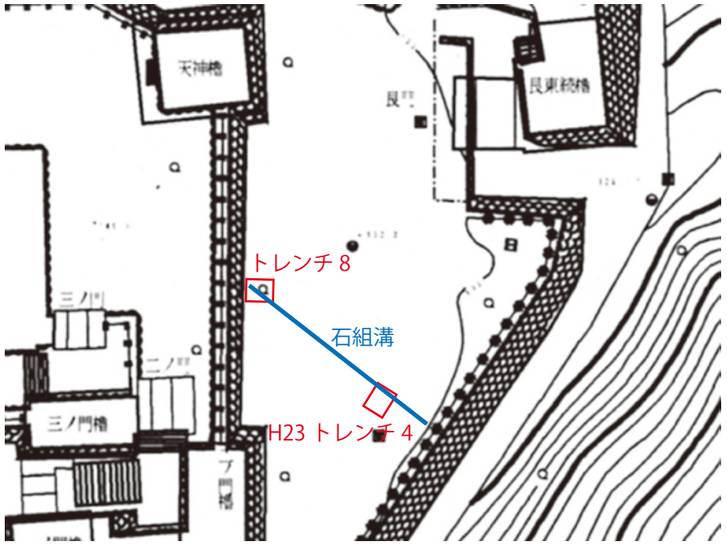


図４　トレンチ８と H23 年度トレンチ４

写真４　H23 トレンチ４の石組溝と石樋　（南東から）

写真５　トレンチ８　水受け（東から）

3）トレンチ 11

この調査区では、石垣と石組溝を確認しました。石垣は、一部の絵図に描かれており、また昭和 48 年の「紫竹門西石垣調査」において僅かに報告があったものの、その存在は忘れられていました。しかし、今回の調査においてその存在が明らかとなりました。

石垣は、最高２段を確認しました。１段目は根石です。一般的にこういった石垣の前に二重に造られる石垣は「はばき石垣」と呼ばれ、孕んだ後ろの石垣を補強するためのものです。２段では補強の意味を持たないことから、本来は上に何段か積まれていたと考えられます。元々は「はばき石垣」だったものを江戸後期の本壇石垣の改修の際に、根石を残したまま取り除いてしまった、あるいは石材そのものを転用したのかも知れません。そのためでしょうか、幕末の絵図（亀郭城秘図）には描かれていません。

石組溝は紫竹門の西に見える溝の延長部分です。近代以降のかく乱により南側の石組は無くなっています。

焼土層は、昭和 8 年の放火により焼け落ちた南隅櫓ほかの残骸です。この層からは釘が出土しています。

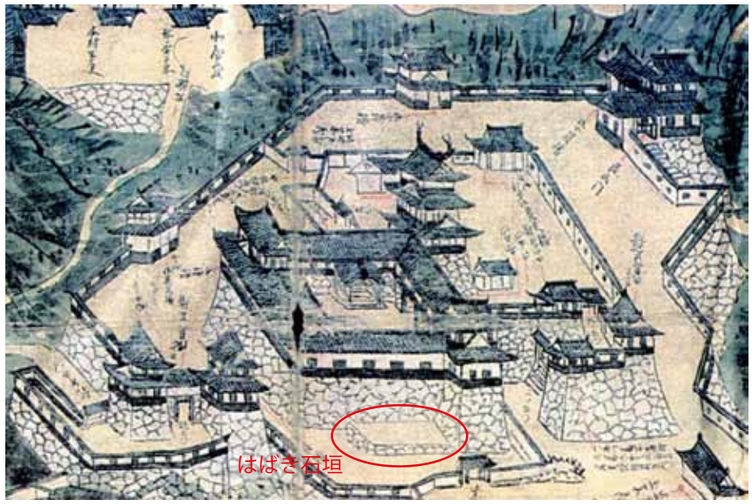
4）トレンチ 12

この調査区では、石組溝を確認しました。これまでの石組溝と比べて石材の規模が大きく、まるで石垣の石材のようです。石材の傾きから東から西へ排水溝と考えられます。しかしトレンチ８の上部で見られたような石樋はなく水の出どころは不明です。

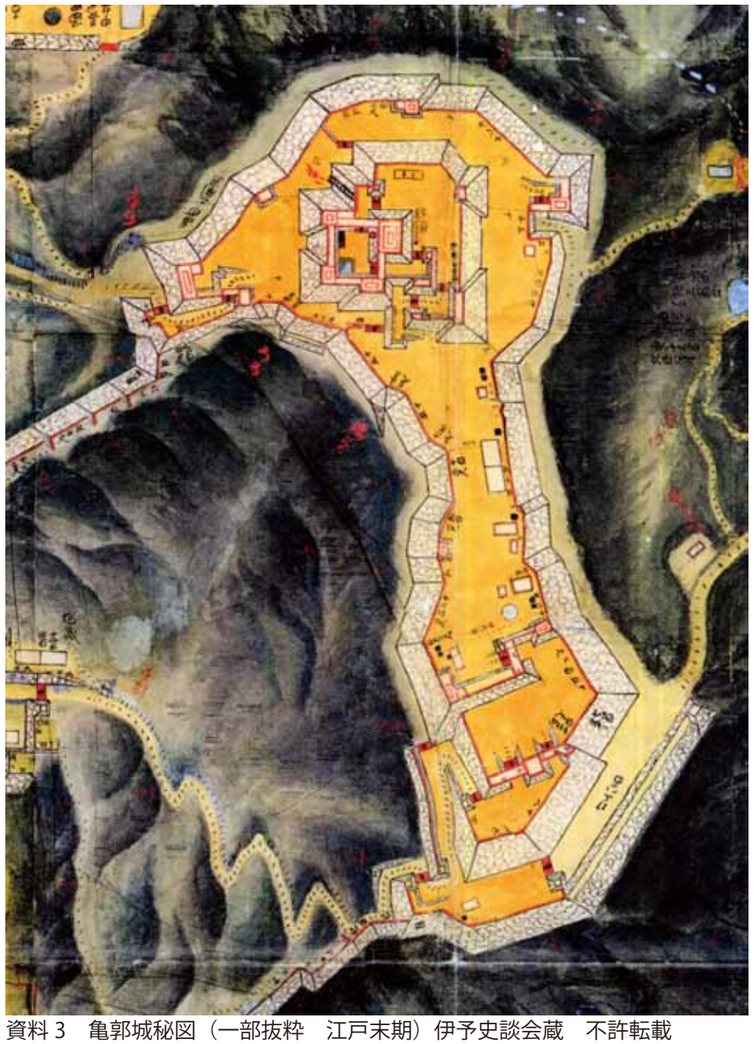
幕末の絵図（亀郭城秘図）をよく見ると、この場所には門と柵が黒線で描かれ、柵の北側に青線が引かれています。この絵図の特徴として、溝や水場は規模の大きなものしか描かれていないことから、この石組溝も大規簿な（長大な）ものであったのかも知れません。石材が他に比べて大きいのはそのためでしょうか。

写真６　トレンチ 11　はばき石垣（西から）

写真７　トレンチ 12　石組溝（西北から）



資料２　松山城下町宝暦図（一部抜粋　江戸中期）個人蔵　不許転載



資料３　亀郭城秘図（一部抜粋　江戸末期）伊予史談会蔵　不許転載